

症例8 『私を見ている』と言う

- ・ H氏 71才. 女性
- ・ 特記すべき既往症はなし

主症状

症状〔1〕群 2年ほど前から物忘れが目立ち始める。必要なものを何処へ置いたか忘れる。話し合ったこと、注意されたことを覚えていない。

食器などは洗わず、不潔。衛生状態に注意を払えない。

衣類をきちんと着ることができない。

症状〔2〕群 夜中に、外出をしようとするので制止すると、興奮して怒り出す。裸足で家を飛び出す。

「物を盗まれる」「おかねがない」「猫がいる」「鼠がいる」「皆が私を見ている」「人間の首がある」と言う。

自分の布団の隣に小さい布団を敷いて寝る。

花器に排尿する。

食べ物をタンズなどにしまう。

食事を拒否する。人の居ないところでなら食べる。

生活歴

Hは、貧しい農家の長女として生まれた。同胞9名。家は貧しかったので、家計を助けるために進学をあきらめて働いた。非常に働き者であった。評判の美人でもあった。

27才で僧侶と結婚、嫁ぎ先では姑と夫の姉二人と同居。夫はおとなしい人であった。夫は姑や姉たちに何も言えないような性格であった。

29才の時に実家の父が死亡。Hは、実家の母や弟妹たちに、嫁ぎ先から、石けん・手ぬぐいなどの生活用品や菓子などを持って、頻繁に会いに行っていた。

30才を過ぎて二人の女の子を出産。しばらくして、小姑の義姉の一人が結婚して家を出た。

子育てに手がかからなくなった頃、夫のすすめで華道を習った。免状を得て弟子の指導にもあたった。Hの長女は僧侶と結婚して家を継ぎ、次女は結婚して家を出た。

53才の時に姑が死亡、61才の時には同居していた義姉が死亡。夫と二人だけの生活が始まった。夫婦仲は良かった。

66才の時、夫が脳梗塞で倒れた。夫は後遺症で性格が変わり、わがまま、短気となった。

【経過】

Hは、貧しい生活をしている両親や弟妹たちを、常に心配していた。自分だけが経済的に困らない生活をしていることに罪の意識を感じた。嫁ぎ先は幸いなことにお寺なので、檀家からの寄進で、貰い物がたくさんあった。Hは、自分で節約した分を、姑や小姑に内緒で実家へ持って行った。姑・小姑たちがこれを知ったら嫌味なことを言い、激怒するからである。

やがて、姑・小姑たちはHのこの行為を知った。情け容赦なくHを非難し、泥棒呼ばわりをした。そして、Hを厳しく監視した。Hの留守中に、Hのタンズの中まで調べた。Hが蓄えた物を発見すると、黙って取り上げてしまうこともあった。

このような出来事のため、しばしばHは物陰で泣いていたようである。Hはその後も自分の分を、なんとか節約しては、こっそり実家に運んでいた。Hの父親が亡くなり、母親や弟妹たちの生活の困窮はひどいものだったからである。

この頃、天井を走る鼠、部屋に入る猫までもが、自分を見張る姑・小姑の手先に思えるほど H はビクビクしていた。強い恐怖心から天井のシミまでもが、自分を監視している人の顔に見えたのである。

姑・小姑がいなくなり、ようやく遠慮のいらぬ生活が始まった時に、夫が脳梗塞で倒れた。優しかった夫は、後遺症で性格が変わった。H は夫に文句の言われ通しの生活となった。姑や小姑の生きていた頃と同じ生活に戻ったようであった。

やがて、H は認知症に陥った。今と昔の区別がつかないときが出現した。家では幼い弟妹たちが貧しい生活をしていて、H を待っていると思うようになった。貧しい母親・弟・妹のことを思うと、自分がしている習い事の『お花(花器)』などは、もうどうでもよくなった。H は家へ急ぐ。そして、母やまだ幼い弟妹を喜ばせようとする。そして、皆を自分の布団の横に寝かせ、安心させようとする。

この行為をさえぎる者に対しては、H は怒り、裸足で外へ飛び出しても母や弟妹の居る家へ行こうとした。

入院後 H は、物かけて一人で泣いていることがあった。嫁ぎ先でよくあったことなのであろう。食事を摂らない時もある。

「お母さんや弟さんたちにあげる物はここにあるから、H さんは、自分のゴハンを早く食べてください」と話し掛けると、食事を摂ってくれた。

その後の経過は良好で、他の入院者に『花の生け方』などを指導してくれるほどに落ち着いた。認知症の改善が認められた。

H の弟妹には、H への感謝の言葉を、医療スタッフは H の過去の行為へ賞賛の言葉をもって対応することを続けた結果である。

H を『過去』の心配の日々から『現在』の安心の日々へ連れ戻すことを治療・看護の目的とした結果である。

【まとめ】

貧しい弟妹や母を助けることができなかつた昔の日々が、現在の H の毎日となっていた。母や弟・妹たちへ、自分の思いを届けることができないことの悲しみの日々が続いていたのである。

言い換えれば、そのような昔の悲しみの日々が H の思考と感情の全てになってしまっていたのである。

このことは、生活史が、H を時期を早めて認知症に陥らせた理由であることを教えてくれている。

同時に現時点でも改善があったということは、もっと早期に対応が開始されたら、もっと良い結果を得られたであろうと考えられる。

つまり、認知症の症状などは改善されても、進行したレベルまでの認知症の後遺状態は残るからである。

それは、火傷は治っても、火傷の程度に応じた瘢痕は残ると似ているのである。

自分の失敗・忘れっぽいことなどを隠しておきたい高齢者は、周囲の人たちの目を過度に意識していることが多い。このような人の場合、『見られている』『ぞいている人がいる』『誰かがいる』などの訴えとなる。